

自ら学びに向かう子

1 研究主題設定の理由

本校では、令和7年度から研究主題を「自ら学びに向かう子」とし、研究を進めてきた。この研究主題のもと、昨年度は「自ら考えたいと思わせる工夫」と「「わかった・できた」に迫る工夫」の2つの重点として取り組み、国語科を中心に研究を積み重ねてきた。

成果として、実物や具体物を提示したり、単元のゴールのモデルを示したりすることで、児童が見通しをもち、主体的に取り組む姿が見られた。また、児童の疑問や興味関心を聞き出し、そのことについて考えたり、話し合ったりすることで、必要感をもたせることができた。また、児童の「わかった・できた」に迫るために、既習内容をワークシートやヒントカード、GIGA 端末に提示することで、児童が必要に応じて、それを活用し理解につなげることができた。

しかし、一定の成果が見られる一方で、本校の課題として挙げられたのは、教師が導入で児童の意欲を引き出そうとしても、まだ不十分な点があるということである。それは、付けたい資質能力や目的意識・相手意識が曖昧になってしまったり、児童の実態や興味関心を的確に把握できていなかったりすることが原因として考えられる。児童の意欲が低下すると、理解も不十分になったり、考えの深まりに至らなかったりしてしまう。

今年度も、本校の授業の取組として児童が課題に対して「やってみたい、おもしろそう」など興味関心をもち、単元を通して主体的に学習に取り組む姿を目指す。そして、最後まで粘り強く課題を解決しようとし、「わかった・できた」という達成感を味わい、学びの自覚化につなげるようにしたい。また、年間を通して、一度は単元内自由進度学習にも挑戦し、児童が自ら調整しながら学習を進め、「わかった・できた」につなげていきたい。

このような児童の姿を全教職員で目指し、今年度は、国語に限らず、教科一般で学校研究を進めていく。全教職員が様々な教科を研究し見合うことで、研究の幅を広げていく。そのため、今年度の研究主題も「自ら学びに向かう子」とし、「自ら考えたいと思わせる工夫」と「「わかった・できた」に迫る工夫」の2点を研究の重点とする。

(1) 目指す児童の姿

授業における「自ら学びに向かう」具体的な姿を、以下の姿と捉える。

- ・「どうして?」「やってみたい」「おもしろそう」など、課題に興味関心をもって取り組む姿
- ・一人一人が自分の課題を解決するために、学び方を自己決定し、自分のペースや力で学習を進めていく姿
- ・個別や協働の学習過程において、試行錯誤しながら進んで学びを進めていき、粘り強く課題を解決しようとする姿
- ・課題解決するために、他者（友達・地域の人・先人・本など）との対話により、自己の考えを広げたり、より妥当な考えにしようとしたりする姿。
- ・自己の学びを振り返り、学びの成長に気付いたり、次の学びへの意欲をもったりする姿

このような「自ら学びに向かう子」の姿を実現するためには、毎回の授業において、児童が課題に対して必要感をもち、最後まで粘り強く取り組むことができるようにすることが重要である。そのために、教師は個々の興味関心や学習状況を見取り、個に応じた支援をしていく必要がある。

単元、授業の最後には、児童が「わかった・できた」と達成感をもち、学びの自覚化につなげることを目指していく。

(2) 研究の重点

重点1：自ら考えたいと思わせる工夫
重点2：「わかった・できた」に迫る工夫

【重点1】自ら考えたいと思わせる工夫（★は最重点指導項目）

★必要感のある導入

- ・考えたくなる言語活動の工夫
- ・見通しがもてる単元・本時計画
- ・付きたい力の確認
- ・既習揭示の工夫
- ・モデルの提示
- ・個々の学習状況に合った手立て
- ・個々の興味関心に応じた手立て
- ・ヒントカードの用意

【重点2】「わかった・できた」に迫る工夫

★一人一人の児童に合わせた支援（声かけ・発問・問い返し）

- ・複数の教材教具の準備（ヒントカード・動画・実物・体験等）
- ・学び方の選択（いつ・誰と・どのように学ぶのか）
- ・相手意識と目的意識を明確にした必要感のある交流
- ・交流のモデルの提示
- ・教師の見取り（学習状況の把握・価値付け・C→Bの手立て）
- ・学びの自覚化 振り返り

(3) 朝日授業デザイン

【みんなで学習編】

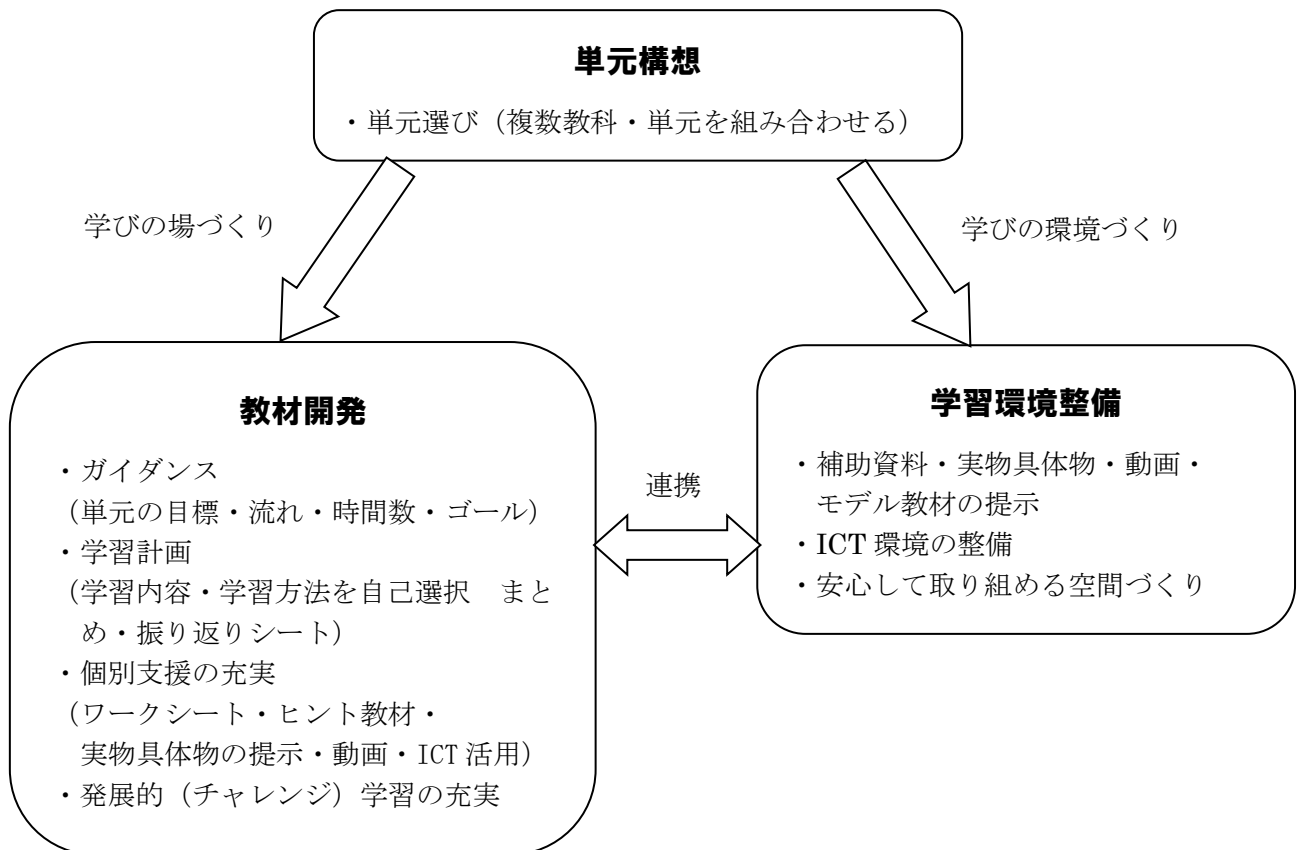
- ・教科一般で研究を進め、単元全体を見通した授業づくりを推進していく。
- ・単線型（同じ課題を解決するために、みんなで学習形態や学習方法を考え、自己決定しながら学習を進めていく）や複線型（一人一人が自分で選択した課題を解決するために、学び方を自己決定し、自分のペースや力で学習を進めていく）の授業を通して、児童が自ら学びに向かうことができるようにする。
- ・児童が自ら学びに向かうことができるよう、4・5月は「学びの土台」を重点的に指導していく。単元内の複線型の学習過程に必要な「学び方」「見方・考え方」が身に付くよう、繰り返し指導を行い、積み上げを行っていく。
- ・1時間の授業のねらいを教師が明確にもち、指導、支援を行っていく。
- ・授業の中での児童の発話量、活動量を増やしていく。
- ・授業の終末では、一人一人が学びを自覚できるよう、振り返りの視点を明確にし、まとめや振り返りの時間を十分に確保していく。

【じぶんで学習編】

- ・2学期後半もしくは3学期前半に、単元内自由進度学習を全学年で10時間程度取り入れ、子供に委ねる授業に挑戦していく。

「じぶんで学習」の流れ

- ①ガイダンス（単元全体の目標や流れなどの見通しを子供たちがもつ）
- ②計画（ガイダンスをもとに、子供たちが自分で学習計画を立てる）
- ③追究（課題について考え解決する）
- ④まとめ・振り返り（学習内容・学習方法について振り返る）



2 自ら学びに向かう子の育成を目指した朝日授業デザイン

◇カリマネの柱 「自ら考え 行動できる子」

重点1

自ら考えたいと思わせる工夫

重点2

「わかった・できた」に迫る工夫

	単線型	複線型
導入 5 〜 10分	前時の振り返り・学習過程の確認 ○ペア・グループ・挙手で確認（簡潔に） 問いを見つける ○これまでとの違い・ズレ ○児童の意欲を高めるような教材・教具の提示、場の設定 課題をつくる ○児童の言葉で ゴールの見通し ○具体的な姿 ○付けたい力の明確化	前時の振り返り・学習過程の確認 ○一人一人が確認 問いを見つける ○一人一人が解決したい課題を設定 課題をつくる ○児童の言葉で ゴールの見通し ○具体的な姿 ○付けたい力の明確化
展開 20 〜 30分	同じ課題を解決するために、みんなで学習形態や学習方法を考え、自己決定しながら学習を進めていく 〔課題について 学び方を自己決定〕 ★解決するための支援	一人一人が自分で選択した課題を解決するために、学び方を自己決定し、自分のペースや力で学習を進めていく 〔自己選択した課題について 多様な学び方から自己決定〕 ★自走するための支援
終末 10 〜 15分	まとめ ○付けたい力が身に付いたかを意識（課題との整合性） ○児童の実態に合わせて（キーワード・条件をつけて・自分の言葉で） ○一人一人が自己の目標を達成 振り返り ○学びの自覚化（変容を意識） ○次の学習への意欲	まとめ ○付けたい力が身に付いたかを意識（課題との整合性） ○児童の実態に合わせて（キーワード・条件をつけて・自分の言葉で） ○一人一人が自己の目標を達成 振り返り ○学びの自覚化（変容を意識） ○次の学習への意欲

学び方の選択

誰と（形態） どこで（場所） 順序
方法（端末・ワークシート・ノートなど）
時間配分

何を（対象）

考えのもと

知識・経験・既習・関連図書・インターネットなど

見方・考え方を促す

着目する視点を与える
声かけ・問い返し

協働的な学び（交流）

友達・地域など
教師によるコーディネート

〔教育目標〕 自ら学び 心豊かで たくましい子 の育成

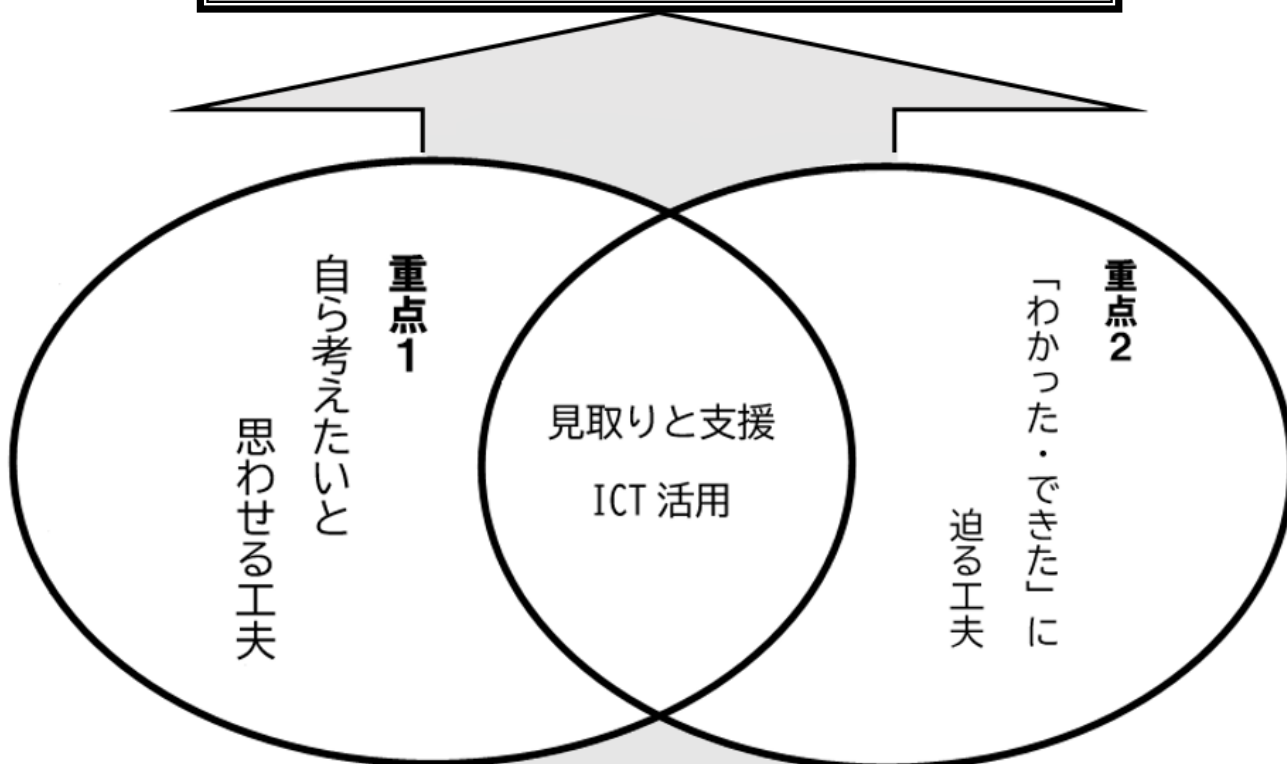
カリマネの柱 自ら考え 行動できる子

－ めざす児童の姿 －

課題を解決しようと、自分から考え、学びに向かおうとする姿

研究主題

自ら学びに向かう子



付けたい資質・能力に迫るための教材研究

学びの土台

朝日トーク

基礎基本の定着

生徒指導の4つの視点を

生かした授業づくり

- ・自己決定の場の提供
- ・自己存在感の感受
- ・共感的人間関係の育成
- ・安心・安全な風土の醸成

授業力向上に向けた体制づくり

- (1) 朝日授業デザインを基にした日常的指導
- (2) 研究授業、事前研・事後研の充実
- (3) OJT の実施